

アフガーニー

—イスラーム世界を駆け抜けた男—

大船高校 早川英昭

一 はじめに

イギリスを中心とするヨーロッパ列強の圧力と植民地化の動きが強まる十九世紀のイスラーム世界で、イスラームの政治的自立とイスラーム哲学の復興を模索し、具体的に各地を遊説し、連帯を画策し続けた男が、ジャマルッディーン・アル・アフガーニーである。ジャマルッディーンとは「宗教の美」という意味だが、むしろ宗教の力を信じて列強との戦い、専制政治との戦いに取り組んだ一生だった。それは幕末の吉田松陰と坂本龍馬を（あるいは寛政時代の高山彦九郎も）合わせたような活動であった。彼の政治的活動はほとんど具体的成果を上げなかったが、間接的影響は大きく、エジプトのオーラビー運動、イランのタバコ・ボイコット運動、スーダンのマフディー運動などに影響を与えている。また弟子のムハンマド・アブドゥフやサード・ザグルールなどを通して、後世のパン・イスラーム運動や、いわゆるイスラーム原理主義運動などを含むイスラーム運動全体に大きな影響を与え続けている。冷戦後の世界を理解する上で必須の近代のイスラームの動きを、ここではアフガーニーを通してまとめてみたい。

二 アフガーニーの思想と行動

生い立ちと西洋の衝撃

アフガーニーはフサイニー（シャリーフ）の子として、イラン西

北部のアサダバードで生まれらしい。だからアサダバードとも呼ばれる。これはイランや欧米の説であるが、本人はアフガニスタン生まれであると称している。十代まではイランのマドラサで伝統的教育を受けた。この段階でどの程度改革的思想に染まっていたかは分からないが、イブン・シーナなどの合理主義哲学を学んではいたようだ。十代の終わり頃インドへ行き、そこでヨーロッパの近代諸科学に触れるとともに、イギリスの植民地支配と、インド大反乱を目撃した。彼はその衝撃の中で、なぜイスラーム世界はヨーロッパに圧倒されるようになったのか、それを打破するにはどうすればよいのかを、哲学的に、また政治的に模索するようになった。そして各地を遍歴する中でその思索は深まっていった。

まず、なぜイスラーム世界が圧倒を受けるようになったのか。それはイスラーム社会の停滞に原因があるとして、社会的改革の必要性を主張した。具体的にはイスラーム精神を見直すことであり、一方で西洋近代科学技術や制度の導入を積極的に認めることであり、また専制政治を打破して民主的な社会を実現することであった。

イスラーム精神の見直しでは、後に弟子のムハンマド・アブドゥフが理論化した「サラフィー主義」が上げられる。それはイスラーム自体の墮落を反省し、本来のイスラームの優れた価値を再認識する一方、柔軟であったイスラームの原点に戻り、改革すべき点には積極的に取り組むべきだというものである。その改革には理性と主体性が発揮されるべきだが、イスラームはそもそも人間の自己変革の能力を認めている宗教だとし、蔓延している運命論（アル・シャブル）を批判した。そして宗教と科学的事実の矛盾すべきものではなく、仮にそう見えたとしたらそれは再解釈の必要があると、「イ

ジュテイハード（イスラーム学者による教義解釈行為）の再開を主張した。彼は、イスラーム教徒は西洋の猿まねではないイスラーム独自の近代化を成し遂げることができると訴えている。また専制政治についても、支配者の役割は社会を構成する人々の幸福や便宜、功利を図ることにあり、それを妨げるものであつてはならない。妨げる者は専制であり、打倒されなければならないと主張している。そして、ヨーロッパの圧力を打破するためには、イスラーム世界全体が高い宗教心を維持し、イスラーム世界の分裂を防ぐよう努めなければならない。そして、イギリスをはじめとする西洋の帝国主義、植民地主義に反対する運動と専制政治打倒とを結び付けなければならないと主張している。

革命家としての運動論

彼は広範な民衆の団結を呼びかけ、専制政治打倒を主張しながらも、一方で専制君主との連携をも画策している。彼はアフガニスタン、イラン、エジプト、インド、オスマン帝国を訪れ、宮廷政治にも深くかかわっている。ロシアではイギリスと対抗しよう仕向けてもいる。そこが哲学者・教育者であるとともに、清濁合わせ飲む革命家でもあつたところである。パリで弟子のアブドゥフと発行した『固き絆』では、「バルチスタンの民はイギリスがアフガニスタンに侵入した時、なぜ軍勢を結集して同胞を援護しなかつたのか。アフガン人はイギリスがペルシアに介入した時、なぜ座視していたのか」「インド反乱の時、中央アジア、アフガニスタン、イランがなぜ背後からイギリスを攻撃しなかつたのか」と非難している。また「ムスリムは民族や人種によって結合することなく、ただ宗教の紐帯のみに依存しなくてはならない」「スンニー派、シーア派の違

いを乗り越えて、政治的な違いも乗り越えて、宗教的同胞精神をもつて団結せよ」と主張している。実際彼はオスマン帝国、イラン、アフガニスタンの君主たちを同盟させ、植民地下のイスラーム教徒とも共同戦線を張ろうとした。また非イスラーム圏のアジアやアイルランドなどの連携も模索している。しかし、これらは実現できなかった。「権力者が勢力争いにうつつを抜かしているからイスラームの統一が損なわれる」と『固き絆』で批判している。そして最後の賭けであつたアブデュルハミト2世のパン・イスラーム主義への協力も、スルタン専制体制の維持を最優先させる路線と合わず、挫折して終わった。

彼は幽閉先で亡くなる三日前に、イランの同志に宛てて手紙を書いている。その中で「私は、自分の思想の全ての種を、それを素直に受け入れる人民の心の中へ蒔けばよかった！あの無能な主権者という、塩っからい不毛の土壤に、豊かな実りと恩恵をもたらす私の種を、無駄に蒔いてはいけなかつた。あの土壤に植えたものは、枯れしぼんでしまった。この年月、私の善意の忠言も、何一つ東洋の支配者たちの耳にはしみ通っていかなかつた。」と嘆き、一方で同志たちに対し「投獄や虐殺を恐れるな、時を移さず闘え、専制主義の個々の代理人を滅ぼしたり叩き出したりすることになしに、その土壤を破壊することに極力努力せよ。ペルシア人の幸福を妨げている慣習を廃棄することに極力努力せよ。君たちと他の民族との友好を妨げている障害物を取り除くよう努力せよ。」と訴えている。

エルネスト・ルナンとの論争

アフガーニーはまた、フランスの文献学者エルネスト・ルナンの民族的偏見とも戦っている。ルナンは「セム語は構造的に個性的な

神を生み出すことができず、唯一神しか想定できない。また近代化に適合しない不完全な言語であり、セム系人は哲学や学問とは無縁の信仰だけを持ち、文明を創造する能力を持ち合わせていない。イスラーム教徒は科学的合理性を持ち合わせておらず、独創的な発明ができないので西洋科学合理主義が広がれば、将来イスラーム教は消滅する」と述べている。

これに対し、アフガーニーは「イスラームは近代科学合理主義と矛盾するものではなく、預言者ムハンマドが定めた法は自然の法則と同一のものである。イスラームの教えは論理と合理性によって証明することができる」と、西洋に向かってイスラーム教の合理性を強く訴え、イスラーム同胞に模倣だけではない内発的な近代化を呼びかけている。

アフマド・ハーン（カーン）への批判

またインドのアフマド・ハーン（カーン）に対しても非難を繰り返した。ハイデラバード滞在中に発表した「ネーチャリー派の真実とネーチャリーの人々に関する解説」では、直接ハーンを名指しはしなかったが、ハーンを自然崇拜者（ネーチャリー）、物質主義者と見なし、まず次のような書簡で問いかけをしている。「『ネーチャリー』と呼ばれる人々は今やどの町々にも見受けられます。そしてこの一派は、特にムスリムの間に確実に支持者を増やしております。私は『ネーチャール』の真実とは何なのか、いつこの一派は現れたのか、『ネーチャリー』一派はその新奇なやり方で文明を改革しようとしているのか、それともまた別の目的を持っているのか、宗教と相容れないのか、それとも適合するのか、それが文明や社会組織に与える総合的な影響は、宗教によってもたらされたものと比べて

どうなのか……」そしてそれについてのアフガーニーの解説という形で論を展開している。

アフガーニーによると、宗教には三つの信念と三つの特色がある。それは「人間が生き物の中で最も気高い」「自身のコミュニティが最も優れている」「人間は世界をより改善し、高度なものにするために生まれて来た」という信念と、「人間としての反省をもたらず恥の概念」「人間同士の関係に不可欠の信頼」「他人を不幸や災害から守り救う誠実さ」という特色である。これらにより人間は自らを律し、多くの知識を獲得し、道徳を向上させ、文明化への前進を遂げて来たというのである。これに対しネーチャリー派は、「自分が五感で感じ取る物事や物質以外は信じようとせず、自然の摂理（ネーチャール）によって説明しようとする。それは宗教を通じて人間が獲得している信念や特質を形骸化し、社会や政体を衰退化させる。なのにネーチャリーは真実の神秘を説き明かす秘教の奥義をもたらず者、偏見を取り除く啓蒙者、預言者、教育者、慈善家のように振る舞おうとしている」と非難し、その後『固き絆』ではハーンの実名を上げて再度非難をしている。

しかし、ハーンの主張は、イスラーム精神を忘れず、現在の信仰、道徳、文化規範を擁護しながら、イギリスによってもたらされた近代的科学、技術、知識体系を受け入れようとするもので、その点ではアフガーニーの主張と基本的には一致していた。アフガーニー自身が保守派から同じような攻撃を受けていたにもかかわらず、ハーンとの連帯ではなく、非難・攻撃にでたのは、一つにはアフガーニー自身が保守派までも巻き込んだ反植民地運動を展開するために、意図的に正統派イスラームの擁護者の振りをするようになったため

ある。更にもう一つは、ハーンの方向性が、新しい科学知識や技術の習得のために英語教育の振興を図ることから一歩進み、インドでの少数者であるムスリムの社会的権益を擁護するため、ヒンドゥー側の反植民地運動から離れ、イギリス植民地体制へ擦り寄っていったことへの反発がある。アフガーニーは同じような近代化の思想家であるがゆえに、ハーンの行動を裏切りと感じ、ことさらその違いを強調したかったのである。

アフガーニーの評価と影響

このようにアフガーニーの思想はイスラームの高い精神を維持しながらも近代化を受け入れる先駆的なものであった。しかし、一方ではその思想を現実化しようとする行動に走る革命家でもあった。そこで政治的駆け引きでその主張を変えることも辞さない「打算的現実主義」の面をも色濃く持っていた。その点では彼の思想は未完成のままであつたとも言える。しかしそこが後世多様な解釈を可能にし、「哲学の師」と仰がれる所以でもある。

彼と長年行動を共にしたアブドゥフは、『堅き絆』について「思想はすべて我が師から、表現はすべて私の筆から」と述べている。後に別れてエジプトに帰り、司法・教育に尽くしたが、その弟子のラシードリダーが発行する『マナール(灯台)』は『堅き絆』を受け継ぎ、アフガーニー、アブドゥフらの思想は受け継がれていた。

三 参考文献

小杉 泰 「アフガーニー東方の連帯・イスラームの復興」

歴史学研究会編『講座世界史七「近代」を人はどう教えてきたか』
東大出版会 一九九六年

加賀谷寛 「アル・アフガーニーとムハンマド・アブドゥフ」前嶋

信次ら編『オリエント史講座六』学生社 一九八六年

大石高志 「アフガーニーとアフマド・カーン」川田順造ら編

『岩波講座・開発と文化二歴史の中の開発』一九九七年

山内昌之 「近代イスラームの挑戦」『世界の歴史二〇』

中央公論社 一九九六年

加藤 博 「イスラーム世界の危機と改革」

『世界史リブレット三七』山川出版社 一九九七年

小松久男 「危機と応戦のイスラーム世界」

『岩波講座世界歴史二二』一九九八年

板垣雄三 「イスラーム改革思想」

『岩波講座(旧版)世界歴史二二』一九七九年

小川 忠 「原理主義とは何か―アメリカ、中東から日本まで―」

講談社現代新書一六六九 二〇〇三年

湯川武編 「イスラーム国家の理念と現実」

『講座イスラーム世界五』

栄光教育文化研究所 一九九五年

宮田 律 「物語イランの歴史」中公新書一六六 二〇〇二年

『岩波イスラーム辞典』岩波書店 二〇〇二年

大川周明 「復興亜細亜の諸問題」中公文庫 一九九三年

野原四郎訳 「ある東洋の改革者の手紙」

『世界史事典二二三資料編東洋』平凡社

四 アフガーニーの年譜

- ＜その足跡はアフガニスタン・インド・イラン・エジプト・トルコからヨーロッパまで＞
- ・ 1838/39 アフガニスタンで生まれ、そこで子供時代を送ったと自称。イラン西北部のアサダバードで生まれた（イラン・欧米の説）ので『アサダバーディー』とも呼ばれる。＜アフガン人の一家がイランに追放されたか、イラン人の父がアフガニスタン 駐在中に生まれたか？＞ ムハンマドの孫フサインの子孫である「フサイニー＜サイイド（シャリーフ）の1つ＞」の血統に属すとしているからアラブ人でもある
 - ・ 1848頃（9/10歳） イランのカズヴィーンのマドラサで学ぶ
 - ・ 1850頃（11/12歳） イランのテヘランのマドラサで学ぶ
 - ・ 1852頃（13/14歳） イラクのナジャフで学ぶ＜イブン・シーナなど合理主義の哲学を学ぶ＞
 - ・ 1856（17/18歳） イランのブーシェフルで学ぶ
 - ・ 1854?～56/57? インドを旅する(?) 西洋近代諸科学に触れる、インド大反乱に衝撃を受ける
《この頃までの足跡は不明なことが多い》
 - ・ 1861頃（22/23歳） メッカ巡礼
 - ・ 1865～66（26/27～27/28歳） テヘラン
 - ・ 1866（27/28歳） インドからアフガニスタンに入国＜アフザル・ハーン及びアーザム・ハーンに寵を得て外交顧問(?)として活躍、反英政策具申、君主がシール・アリーに代わり国外追放
 - ・ 1869（30/31歳） ボンベイ、カイロ＜アズハル大学に招かれる＞
 - ・ 1869 イスタンブル 政府高官やタンジマート後半期の改革主義者と交わる。改革による帝国再建主張
 - ・ 1871（32/33歳） 新設の学芸の館（ダリユル・ヒュヌン）で講演＜産業や知識を人体の器官にたとえて近代的産業育成の重要性を説いた＞シェイヒュル・イスラーム（イスタンブルのムフティー＜教令を発する最高権威者＞）の反感を買い国外追放
 - ・ 1871～1879 エジプトに渡る リヤード・パシャ（首相）から年俸を供与される。カイロ、アレキサンドリアなどで信奉者に囲まれる＜カイロでは自宅を教場としてアブドゥフ、ザグルールなどの弟子を育て、哲学・神学・法学・天文学などを講じた。アズハル大学の教授・学生に影響与える（アズハル大学でも教えた？）イジュティハードの再開を唱える。また毎夕コーヒー店でも若者に革命を説いた＞立憲主義改革を求める知識人・官僚らの組織化にも寄与 後の国民党につながる
 - ・ 1876 《エジプトはヨーロッパ人内閣の下で英仏による財政の二重管理を受けるようになる》
 - ・ 1876 《「アフラーム」紙創刊、アブドゥフら反植民地の論陣を張る》
 - ・ 1877 週刊紙(誌?)「ミスル（エジプト）」を弟子たちが創刊》
 - ・ 1878 《週刊紙(誌?)「ティジャーラ（商業）」を弟子たちが創刊》
アフガーニーも変名で寄稿＜イスマーイルの暗殺計画も立てた？＞
 - ・ 1879（40/41歳） 《列強の圧力でエジプト副王（ヘディーヴ）イスマーイルが廃位となり、息子のタウフィークに代わる》アフガーニー国外追放、インド・ボンベイに渡る《オーラビー運動の中心となる「国民党」結成（綱領はアフガーニーの影響大）》
 - ・ 1880/81～82?(41/42～43/44歳) 藩王国ハイデラバードでイギリスの監視を警戒して2年間過ごす。
 - ・ 1881～82 「ネーチャリー派の真実とネーチャリーの人々に関する解説（物質主義者への反論）」を公刊、対英従属路線を強めるアフマド・ハーン（カーン）を批判

- ・ 1881～82 《エジプトでオーラビー革命、82・9 イギリス軍にオーラビー降伏、セイロンに流罪》
- ・ 1882 (43/44歳) カルカッタ<オーラビー革命への影響を恐れたイギリスはアフガーニーがカルカッタから動かぬように命じる、オーラビー降伏後解除>《アブドゥフがエジプトから国外追放される》
- ・ 1883 (44/45歳) ロンドン
- ・ 1883～85 (44/45～46/47歳) パリ アブドゥフと行動を共にする
- ・ 1884 (45/46歳) 3月～10月 パリで「固き絆 (アルウルワ・アルウスカー)」誌発行 (18号まで出す) <秘密結社「固き絆協会」の機関誌として「東方の人々全体およびムスリムたち」に向けて発行、アフガーニー発行責任者・アブドゥフ編集長>「インドの物質主義者たち」(固き絆に掲載) で再びアフマド＝ハーンを批判。フランスの文献学者ルナンと論争
- ・ 1885 (46/47歳) ロンドン イギリスの帝国主義政策を改めさせようと政府・世論に働きかける (83?) スーダンのマフディー運動へも対応《この頃アブドゥフと別れる、アブドゥフはその後単独でバイルート滞在、1889許されて帰国》
- ・ 1886 (47/48歳) イランのナースイル・ディーン・シャーの招きでイランに渡る (帰国?) ブーシェール、シーラーズ、イスファハーン、テヘランなど各地を訪問 政府の顧問格として司法上の改革などを推進、すぐにシャーと対立(?), 保守的な首相・官僚の妨害で逮捕され、国外追放となる
- ・ 1887 (48/49歳) モスクワ
- ・ 1888～89 (49/50～50/51歳) サンクト＝ペテルブルク ロシアの保守派とも接触
- ・ 1889頃 ミュンヘン
- ・ 1889～90 再びイランのシャーに招かれてテヘランへ渡る
- ・ 1890 《イランでタバコ専売権がイギリス系のペルシャ帝国タバコ会社に転売さる》
- ・ 1890 (51/52歳) シャーと対立、アフガーニーは病身だったがシャーの命令で国外追放となる
- ・ 1891 (52/53歳) ケルマンシャー (イラン)、バグダード、ロンドン
- ・ 1891 《2月シャーがタバコ専売権を売り渡したことが公表さる、反対運動起きる》アフガーニーはロンドンからシャーを断罪した手紙を大アヤトollahに送る《12月タバコ禁止の教令出される<タバコ・ボイコット運動頂点に> 92・1 専売権撤回》
- ・ 1892 (53/54歳) ロンドン滞在中にアブデュル・ハミト 2世の招きを受けイスタンブルに渡る
- ・ 1892～97 イスタンブル滞在 アブデュル・ハミト 2世の提唱するパン・イスラーム主義の運動に協力を要請される。アフガーニーはアガー・ハーン・ケルマーニーらイランからの亡命者 3人と共に各地のシーア派指導者にパン・イスラーム運動への協力を呼びかける。イランのシャーへの非難は禁止されるが、イランからはアフガーニーらの運動はカージャール朝打倒を意図したものと抗議《オスマン政府はアガー・ハーン・ケルマーニーら 3人を監禁入獄さす》アフガーニーは次第にスルターンと対立、しかし出国は許されず。
- ・ 1896 (57/58歳) 《弟子のレザー・ケルマーニーがナースイル・ウッディーン・シャーを暗殺》イラン政府はシャー暗殺を教唆したとしてアフガーニーらの引き渡しを要求。アブデュル・ハミト 2世はアフガーニーはイラン人ではないとして引き渡しを拒否、他のイラン人亡命者 3人は引き渡されタブリーズで処刑される。アフガーニーはイスタンブルを離れることが許されず 幽閉状態
- ・ 1897 (58/59歳) 3月 幽閉先からイランの同志に最後の手紙を送る 3月9日 病没 (毒殺説もある)